

和泉キャンパスにおける情報環境の整備について



一部教務部長 納谷 廣美

マルチメディア時代の到来は、人々の生活に質的転換をもたらしたし、今後とも多くの分野において高速かつ大規模的に進展していくことになるであろう。このことは、政治・経済のみならず文化・教育などの諸方面にわたって、等しく現実化することであろう。

これを受けて、大学の役割も大きく転換を求められることは必然といえよう。新制大学は、戦後約 50 年の歴史の中で、自己改革をすすめ、それなりに対応してきたが、現在では「家庭崩壊」・「学級崩壊」さらには「学校崩壊」などのキャッチフレーズのもとに表現される教育問題の波は、確実に、しかも間近に迫った課題として大学へ押寄せてきているといえよう。加えて「少子化の問題」がある。また地球環境問題（人口、自然保全、平和など）に直結する新課題「共生社会の確立」が求められている。近い将来は「生命科学」の時代（それは、人類にとって未知の分野であり、科学技術の発展のみならず、新しい社会制度的問題を生み出すことになるであろう）になるといわれている。これらの客観的諸状況を勘案すると、本学が現在直面している最重要課題は、新しい世紀に備えて、個性や独創性が重視される社会（知価社会）への対応についての全学的ベクトルを策定することにあるといえる。

今後は高度情報化社会および国際化時代においても「権利自由」、「独立自治」の精神を発揮しうる能力を備えて、堂々と自己の意見をいえる人材の育成を基本に据えて、教育研究を行うことが必要である。その意味においても、改めてリベラルアーツの再評価を実施し、その成果が現在すすめられているカリキュラム再編の中に組み込まれることが期待されている。

映像系・音楽系を対象とする視聴覚教育設備の整備は、和泉キャンパスが本学の、否全国的にみてもトップランナーとして走っていた。このことは、AV 棟の建設などにみられるように顕著な事実である。また、第一校舎の新築とその教室設備において視聴覚・情報教育への対応が整い、当時としては学内で羨望の的となっていた。その後、生田キャンパスの教育研究施設・設備が刷新し、さらに駿河台キャンパスのリバティタワーの竣工をうけて、事態は一変したといえる。財政的状況が厳しくなる中ではあるが、これからは和泉キャンパスの教育研究環境に関する中期整備計画とくに情報化環境の拡充の策定が本学にとって急務の課題といえる。現在では視聴覚施設設備を利用する教員は語学教員に限られていない。また語学教育の方法論としても AV 設備の利用について情報環境の整備と関連づけて検討する時期に入っているのではなかろうか。いずれにせよ、教学サイドの意見を集約して、和泉キャンパスの情報化構想が一日も早く固まるよう、努力をつづけていきたいと考えている。